

A Portrait of the Artist as a Young Man における 自己と社会の関係

西 田 晴 美

〔抄録〕

ジェイムズ・ジョイスの『若き芸術家の肖像』の主人公スティーヴン・ディーダラスは、幼い時から自分が他の子供達とは違っていることを意識していた。彼は自分の内面だけに興味を持ち、魂が絶えず求め続けているものを見極めたいと願い、社会に対してはまったく関心を示さなかった。ところがスティーヴンの社会に対する態度が一転する。変化が起きたのは、魂が希求しているものをスティーヴンが見出した時であり、彼が求めていたのは美を創造することであった。それまでとはうって変わって、この時から彼は社会に眼を向け、社会を源泉として芸術を創りだすようになる。無関心から関心へと、社会に対する態度ががらりと変わるのである。この変化は何によってもたらされ、スティーヴンはどのような意図を持って社会へ飛び込んでいったのか。作品が書かれた20世紀初めのアイルランドというコンテキストの中で、ジョイスが語らなかったこの空所を読んでいく。

キーワード：自己，社会，周縁化，自己表現，アイデンティティ

はじめに

文学作品において作者は作品に託して何らかのメッセージを発信しており、これは読まれることによってはじめて読者の許へ届けられる。イーザー (Wolfgang Iser) によればこうしたメッセージがテキストから読者へと正しく伝わっていくことは、両者に共通な慣習のもとにテキストが成り立っていなければ不可能となる。この慣習はテキストに取り込まれた既存の知識を指し、こうした知識は、先行するテキストばかりではなく、社会規範ないし歴史的規範、テキストが生み出された社会的文化的コンテキストなどに関連している。こうしたテキストの読みに

読者は積極的に創造者として参加し、テキストのさまざまな局面に内包された意味の生産に携わり、これを受け入れる。受け入れることはすなわち、読者が意味を自己の生活に取り入れ、自己の人生の中で活かしていくことである。意味と読者がこうした関係を持った時に、はじめて読者はテキストの虚構世界を構成するうちに自分自身をも構成するのである。読みにおいて読者の想像力が最大限に発揮されるのは、テキストの中で語られていないが内包されている空所を補う時であろう。語られた箇所相互を想像力によって結び合わせて、語られなかった箇所を生み出す。この時語られた箇所は、初めに想像したよりもはるかに大きな意味の幅を広げる。

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の『若き芸術家の肖像』(以下『肖像』と略)は、多くの空所が埋め込まれたテキストの一つと言える。全体として五つの章から成り立ち、それぞれの章がいくつかのエピソードで構成され、各エピソードの間をつなぐ物語は存在しない。クロンゴウズ校での学習や生活の様子が描かれているかと思うと、突然場面が一転して、クリスマス休暇で帰省した時の晩餐の様子が繰り広げられる。ごみごみした娼家街の場面は、たちまち教室の中の情景に変わり、またすぐにアーノル神父 (Father Arnall) による説教へと移っていく。しかしひとつのエピソードが全く異なったエピソードに切り替わっても、テキスト内にクロノジカルな時間が流れているので読者はさほど混乱をきたさない。テキストはステイーヴン (Stephen) の成長と、それに伴う精神的変化の軌跡を辿っている。彼の幼年時代からはじまって、大学生になって自己の芸術を成就させるために祖国アイルランドを捨て、自由を求めて大陸へと旅立つ準備を始めているところまでが描かれている。意識の流れの手法によって、ステイーヴン自らが語り手となり自己の心情を伝える。この内的独白から彼の内面を知る手がかりは容易く見出せるが、一つのエピソードから次のエピソードへの空隙で彼の心がどのように動いたかは空所のまま放置されている。空所部分を読み解くのは読者の裁量に委ねられており、空所の存在が読みの可能性を拡げている。

I

『肖像』を読む時、読者はあるエピソードが次のエピソードへ変わっていくたびごとに成長するステイーヴンの変化を、抵抗なく受け入れることができる。しかし芸術に目覚める前と目覚めた後ではステイーヴンに大きな違いが生じていて、それまではどちらかと言えば内向的だった彼が、随分積極的に人と交わるようになっていく。この変化は読者に何故という疑問を抱かせるであろう。変化が芸術への目覚めを契機として生じたことは疑う余地はないが、魂が芸術と結びつくことによって起こる心の動きに関しては、テキストは何も語っていない。芸術への覚醒を語るテキストの深層には、表現されていないステイーヴンの心の動きが潜んでいる。このテキストの表層に表れない空所を補うことで、何がステイーヴンを変えたのかを読み解いていきたい。

スティーヴンは具体的にどう変わったのかを明確にするためにテキストを詳細に検討すると、彼の社会に対する態度に顕著な違いが認められる。芸術に目覚める前は社会に無関心であったのに、目覚めた後には社会に関心の眼を向けるようになるのである。この両極端な態度の間に横たわるへだたりを補って、無関心から関心への変貌を、一人の人間を貫く精神的変化として矛盾なく捉えるために、スティーヴンの社会との関係を彼の成長と共に辿って詳らかにしている。

スティーヴンは自意識が芽生えるような頃から自分は周囲の子供達とは違っていると感じていた。これは彼の次のような思いから明らかになる。

The noise of children at play annoyed him and thier shilly voices made him feel, even more keenly than he had felt at Clongowes, that he was different from others. He did not want to play. He wanted to meet in the real world the unsubstantial image which his soul so constantly beheld.¹²¹

他の子供達との違いを認めたスティーヴンは黙って周りを観察するようになり、次第に自ら他人との関わりから遠ざかっていく。そして孤独を愛するようになる。孤独であり続ける限り、彼は周囲との差異を意識せずすみ、それを埋めるための苦痛を伴う努力を強いられずすみからである。

ところがスティーヴンのこのような内面にはお構いなく、周囲は彼にさまざまな期待をかける。一般的に世間での受けがよいとされている理想像を彼に求めるのである。すなわち紳士になること、よいカトリック教徒になること、強く男らしく健康になること、母国に忠実であること、母国のすたれた言語と伝統を目覚めさせるのを手伝うことなどである。スティーヴンにはこうした周囲からの期待の声は虚ろにしか響かず、その声が届かない所へ逃避することによって、はじめて彼は安らぎを見出すことができる。彼が外の世界に興味を持たず、自己の内なる世界に惹かれていったのは、次の引用からも明らかになる。

Nothing moved him or spoke to him from the real world unless he heard in it an echo of the infuriated cries within him. He could respond to no earthly or human appeal, dumb and insensible to the call of summer and gladness and companionship, wearied and dejected by his father's voice.¹³¹

このようにスティーヴンは社会に対して無関心の態度をとっていた。ところが芸術に目覚めからは、社会に関心を持つのである。彼が希求する芸術は、この時まで社会に心を閉ざしてきたにも関わらず、現実とかけ離れた絵空事ではない。彼にとって芸術は、人生の中心そのものの表現である。それ故に自己の芸術の源泉を、自身が生を営む日常の平凡事に求める。現実には振り向けられたスティーヴンの眼差しは、次のような思いから確かめることができる。

The faint sour stink of rotted cabbages came towards him from the kitchengardens on the rising ground above the river. He smiled to think that it was this disorder, the misrule and confusion of his father's house and the stagnation of vegetable life, which was to win the day in his soul.

スティーヴンの視線は現実をしっかりと見据え、その本質までも見抜こうとする。このように変わったのは芸術に目覚めたからであり、芸術創造こそ魂が探し求めた末に遭遇した彼の使命である。それを彼は日常世界を源泉として創りだす以上、自己の使命を全うするためには社会と関わらずにはいられない。従って社会に対する態度が無関心から関心へと変わっていく時に穿たれた空所に芸術へ傾倒していく心が潜んでいるとする考えは、説得力があり、先の問いに対する一応の答えになる。

しかしこの考えでは、芸術に目覚めてからスティーヴンが積極的に友人達と関わりを持つようになったことの背後に潜む彼の心情までは説明できない。社会に関心を持つと同時に、彼はそれまで違いを感じて交わりを避けてきた友人達と付き合うようになる。クロンゴウズ校やベルヴェディア校にいた頃には自己の内面世界に引きこもりがちだった彼は、ユニヴァーシティ・カレッジでは自信に満ちた態度で友人達に接している。この変化は、芸術を創りだす際に人間についての深い認識が必要となることからスティーヴンが他者と関わりを持つようになったために生じたと考えられる。ところが、彼が友人達と会話をする場面で相手のことを観察している様子はいかかえず、彼の意識は専ら自分のことに集中している。大学の友人リンチには自己の芸術論を語り、親友の克蘭リーには芸術を成就させるためにアイルランドを捨てて旅立っていかうと考えていることを打ち明ける。従って社会に無関心であったスティーヴンが一転して社会に関心を持ち、自信に満ちた態度で人と接するようになるまでに存在する空所に芸術へ傾倒していく心の動きがあったことをあてがうだけでは、社会に対する無関心は関心へとつながっていかない。この空所にはまだ語られていないスティーヴンの心の動きがあると推測できる。

II

ここまでスティーヴンの社会に対する無関心が関心へと変わっていく途中に存在する空所を補うために、彼の社会との関係を辿ってきた。しかし無関心から関心へと一変するプロットを辿るだけでは、空所になっている心の動きをすべては知り尽くせない。全貌を明らかにするには社会に対する無関心があらわす意味と関心があらわす意味をつかんで、二つの真中に介在する心の動きを読み解かなければならない。心の動きを読むためには、そこに複雑に絡ってくるさまざまな要素を考慮に入れることも必要になる。成長過程にある心は、家庭、友人、社会からの影響を受けていて、これらとの関係を等閑にしては心の動きは正しく捉えられない。これ

を踏まえた上で、空所を同時代の社会的コンテクストの中において読んでいく。

まず始めに社会に対する無関心な態度が意味するものを考察する。先にも述べたように、スティーヴンは自分は周囲の子供達とは違っていると感じていて、彼らのように遊びたいとは思わず、魂が絶えず探し求めているものを見出すことを切望している。興味の矛先は自己の内面世界へと向かい、周囲からの呼びかけは虚ろにしか響かない。外の世界には興味を持ってないのである。また彼は体力的にも他の子供達とは違っていると感じている。クロングウズ校の下級組にいた頃のことである。フットボールをしている時、彼は味方チームのはしっこの、乱暴な足に蹴られない所において、時々走るふりをしていた。そのような時には自分の体が小さく弱々しい感じがして涙がにじんできくる。スポーツに興じる他の子供達と比べて、彼はその仲間に入れない自分に劣等感を抱く。この相対的な劣等感は、彼が周囲の子供達とは違っているという点で、この先成長した時に認識する差異へと通じるものであると考えられる。言い換えれば、彼が社会との間に感じている差異には、劣等感が影を落としていると言える。

もともとスティーヴンは社会に心を惹かれることがなかったので、無関心な態度をとるのは当然であろう。更に彼は、自身と周囲の子供達との違いといった差異を抱え込んでいる。差異の存在は、スティーヴンが周囲の子供達のような社会のマジョリティに同化するのを妨げ、彼を社会のマイノリティとして周縁化する。無関心の背後には、社会とそこに溶け込めないスティーヴンとの関係が、自身による周縁化という形で潜んでいるのである。

それでは今一つの社会に対する関心を持った態度が表す意味は何であろうか。芸術を創り出す時に社会を源泉とすることで社会との接点を持ったスティーヴンは、今度は積極的にその中へ飛び込んでいく。友人達と会話をする彼は自信に満ちていて、周囲の人間との関わりから遠ざかり、社会との差異に傷つくことを恐れて孤独を好んだ彼の姿はそこにはない。しかし彼は芸術を成就させるためなら、祖国を捨てて一人になることも厭わない。彼はその決意をクランリーに語っており、以下のようなやりとりが行われる。

“I do not fear to be alone or to be spurned for another or to leave whatever I have to leave.”…

“Alone, quite alone. You have no fear of that. And you know what that word means? Not only to be separate from all others but to have not even one friend.”

“I will take the risk”

ここでの「一人きりになる」というスティーヴンの言葉には、人と関わりたくないという気持は含まれていない。自己の芸術を守るためなら、母国を捨てて一人になることも辞さないと言うのである。芸術の成就是アイルランドにおいては叶わぬ夢であった。これは同時代のアイルランド社会の状態から推察できる。

アイルランド、特にダブリンは、長い間のイギリスの支配とカトリックの呪縛による抑圧の

ために麻痺状態にあった。そこには頼るべき精神的・宗教的指導者が存在せず、民族的な誇りが失われていた。しかも芸術を志す者にとっては不都合なことに、文化的にも立ち後れていた。ダブリンの民衆は新しい芸術が出現することなど望んでおらず、それどころか新しく生まれたものを受け入れる度量さえあったかどうか疑わしい。アイルランドでは誰もが立ち後れた自国の現代化を望む一方で、何百年も続いた地方の古い習俗や価値観を保ちたいと願っていた。更に悪くすると、芸術家は排斥されて、国外へ追放される可能性さえあった。独立運動の指導者パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-1891) も、内外から裏切られ、カトリック教会からは弾劾されて致命傷を受け、祖国の同胞によって殺されたようなものである。当時のアイルランドは墮落と衰退の淵に沈んでいた。民衆の精神的な拠り所となるべきカトリックは、ケルトのキリスト教の統制のとれた精神を遠い昔に失い、国民を墮落させる元凶に成り果てていた。

こうした状況下では芸術の開花は望めないと判断して、スティーヴンはすべてを捨ててもアイルランドから旅立っていく決意を固める。一人きりになっても構わないとするのは、自分の一番大切なものを守るためである。彼は “I will try to express myself in some mode of life or art as freely as I can and as wholly as I can” と克蘭リーに話している。スティーヴンは芸術を通じて自己表現をしようとしているのである。またリンチに芸術論を聞かせたり、克蘭リーに芸術への思いを表明するのは、自己表現の願望の表れである。スティーヴンが社会に寄せる関心の裏には、芸術や人との交わりを通じて自己表現をしたいという思いが存在している。

III

社会において自己を周縁化することと、社会において自己を表現すること、この二つは一見相反しているように思われる。しかし二つの心情は、一人の人間の中で一つの空所を貫いてつながっているのである。自己表現へと至る道の始まりが自己の周縁化の中に存在する。この道は空所部分でどのような紆余曲折を経るのであろうか。

スティーヴンは社会に対して自己を周縁化しているが、人として生まれてきた以上は必ずどこかの家庭、地域社会、国家に所属することになる。すると彼が日々その中で暮らしを営み、考えたり、行動したりする地域社会や国家が多かれ少なかれ彼の思想形成に影響を及ぼす。ましてや生活の基盤となる家庭の影響力は絶大である。両親や周囲の大人達の考え方や価値観が彼の成長を方向づける。たとえそれが意にそわないものであっても、まだ一人で生きていく術を持たない少年の彼にはその影響下から逃れる策はない。従って、大学へ進学するようになって家庭への従属から開放されたと認識するスティーヴンは、以下のように感じる。

The university! So he had passed beyond the challenge of the sentries who had stood as guardians of his boyhood and had sought to keep him among them that he might be subject to

them and serve their ends. Pride after satisfaction unlifted him like long slow waves.¹⁸¹

このような思いから、家庭や周囲の大人達の存在が彼にとっては圧迫を加えるものと考えられていることは明らかである。家庭の成員であることは社会的な居場所を持つことであり、これは社会における自己の安定感をもたらす。しかし家庭は、スティーヴンの場合のように、必ずしも精神的な居場所にもなるとは限らない。彼は自らの魂が求める居場所を探してさまよい続ける。

精神的な居場所探しの旅は安易なものではない。その土壌となる社会との差異を感じているスティーヴンにとっては尚更である。人は社会生活を送る上で、各人が自分の置かれた立場、すなわち父親や息子、教師や生徒といった役割を、大体世間が期待する通りに果たす。この時その立場は社会における居場所を提供する。しかしスティーヴンの場合のように、自分の役割と自己の本質との間に何か異質のものを見出すと、彼の置かれた立場は居心地が悪くなる。自己の中に二つの相反するものの共存を強いられるからである。スティーヴンは社会において拠り所となる居場所を持っていない。社会の中でのアイデンティティを確立できていないのである。

居場所探しの旅は、スティーヴンが芸術に目覚める海岸の場面へと続いていく。海岸でスティーヴンは、どこからか「ステパネーフィロス」という呼び声を聞き、それとともに波の上を飛んできて、ゆっくりと空をかける翼あるものの形が見える気がする。彼はその空を飛んでいるものを、自分がそれを果たすために生まれ、幼年時代と少年時代の霧の中で追いつけてきた目的の予言ではあるまいかと考える。彼はやがて魂が飛翔するような恍惚状態に陥っていく。魂が少年期の墓から上り、経帷子を脱ぎ捨てて、その名を受け継いだ偉大な工匠ダイダロスのように、魂の力と自由で不滅のものを創造することを確認する。若き芸術家の魂が目覚め、スティーヴンは魂が長い間探し続けてきた人生の目的に遭遇する。それは“a living thing, new and soaring and beautiful, impalpable, imperishable”¹⁹¹を創り出すことであり、これは美の創造に対する彼のスタンスになる。

美に対するスタンスを持ったことが、少年時代に圧迫感を与えていた生きにくさからスティーヴンを解放する。自らが解き放たれたことを彼は以下のように確信している。

What were they now but cerements shaken from the body of death — the fear he had walked in night and day, the incertitude that had ringed him round, the shame that had abased him within and without — cerements, the linens of the grave?

His soul had arisen from the grave of boyhood, spurning her graveclothes.¹⁹⁰

シェリル・ハー (Cheryl Herr) は、美に対するスタンスは社会に対する失望からスティーヴ

ンを守り、情緒的な安定として確立されると言っている。¹¹このスタンスを持って芸術を創造することこそ彼が探し求めてきた人生の目的であり、ここに彼は自己の居場所を見出すことができる。芸術創造によってアイデンティティを確立できるのである。自己の何たるかを知ったステイヴンは、もはや社会との差異を感じて自身を周縁化する必要もなく、社会の中にしっかりと自分の位置を確認している。そしてこの事によって、彼は臆することなく社会や他者との関係性を築くことができる。

おわりに

この時までには相対的にマイノリティとして自己を周縁化してきた彼は、ここに至って自己の絶対性を主張しようとする。マジョリティに同化するのではなく、マジョリティやマイノリティといった括りを解体して社会に参加し、自己の存在意義を承認させることを求める。芸術の創造によって自己表現を行うことにはこうした意味合いも含まれていると考えられる。

ステイヴンは幼年時代と少年時代を通じて感じていた周囲の子供達との差異から多かれ少なかれ劣等感を抱いていた。そのために劣等感を克服して、芸術創造を成就することで自己の優越性を実現させたいという願いはより一層強くなる。¹²彼は芸術を創造するために周縁から社会の中へと飛び込んでいく。ジュリア・クリステヴァが、「バフチーンは、テキストを歴史と社会の中に位置づける。そして歴史と社会それ自体もテキストとみなされており、作家はそれを読取り、また書き改めることによってそこに自らを挿入する」と言っているように、¹³芸術家ステイヴンは社会を読取り、あるいは読み替え、それを詳述することを目指して社会の真っ只中へと旅立っていくのである。

注

- (1) 以下この段落は、次の文献に基づいてまとめた。
Wolfgang Iser. *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response*. (The Johns Hopkins University, 1978)
- (2) James Joyce. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. R.B.Kershner, ed. (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1993) ,p.66.
- (3) Joyce, *Portrait*, p.89.
- (4) Joyce, *Portrait*, p.144.
- (5) Joyce, *Portrait*, p.213.
- (6) この段落をまとめるにあたり、次の文献を参照した。
オフェイロン著、『アイルランド－歴史と風土－』（東京、岩波書店、1997）
- (7) Joyce, *Portrait*, p.213.
- (8) Joyce, *Portrait*, p.146.
- (9) Joyce, *Portrait*, p.150.
- (10) Joyce, *Portrait*, p.150.
- (11) Cheryl Herr, "Deconstructing Deedalus." in James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*.

R.B.Kershner, ed. (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1993, 349.)

(12) アルフレッド・アドラー著、『個人心理学講義—生きることの科学』(東京、新光社、1996)

(13) ジュリア・クリステヴァ著、『記号の解体学—セメイオチケ』(東京、せりか書房、1983、58.)

その他主に参考にした文献

Don Gifford, *Joyce Annotated Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*. 2nd ed.(California: University of California Press, 1982)

Richard Ellmann, *James Joyce*. Revised edition.(New York: Oxford University, 1982)

Norman Holland, "A Portrait as Rebellion." in James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*.

R.B.Kershner, ed. (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1993, 279-294.)

石川准著、『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』(東京、新評論、1992)

(にしだ はるみ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

1999年10月15日受理